

カンポンとカンポン住居の変容（1984 - 2016）に関する考察

－サワハン・クドゥンドロ地区－

日大生産工（院） ○古田 莉香子 日大生産工 山岸 輝樹
日大生産工 広田 直行 日大生産工（非常勤） 布野 修司

1 目的・背景

インドネシアにおいて、カンポンとはムラを意味し、特に都市の中の居住地のことを示している^{※1}。本学の特任教授である、布野修司氏により、カンポン研究の原点となった、スラバヤのカンポン調査が1984年、2006年と行われた。特に、3つのカンポン、サワハン、サワプロ、ドノレジョについて、研究がなされてきたが、今回全く同じフォーマットに基づいて調査を行う機会を得た。

本稿は、その中でもサワハン・クドゥンドロ地区を取り上げ、1984年、2006年、2016年の3つの調査を比較し、30年あまりの間のカンポンとカンポン住居の変容実態を明らかにし、カンポンの特性や変質について、考察することを目的とする。

2 方法

本研究は臨地調査を基本とする。過去に行われた地区での住居の変容について、スラバヤのサワハン・クドゥンドロ地区を対象とし、研究を行う。

本論文は、過去のデータをもとに、各種建物用途、構造等をプロットする。

現地での臨地調査及び、居住者にヒヤリングさらに実測調査を行い、調査結果より得られたデータから、実態を把握し、地区の住居変容についてまとめる。

調査日：2015年7月19日～7月31日・2016年7月23日～8月5日

3 スラバヤ・カンポンの概要

スラバヤはインドネシアの首都ジャカルタに次ぐ、第2の都市であり、東ジャワ州の州都としてジャワ島東端部に位置する。（図1参照）

カンポンは地区によって極めて多様な特性を持つ。カンポンの空間は、日常生活のほとんどをその内部で完結しうる、極めて自律性の高い空間である。カンポンの中では、様々な生活用品などが生産されており、消費機能のみならず、生産機能も持っている。さらに相互扶助のシステムも根付いている^{※2}。



図1 インドネシア地図

4 カンポン・サワハン

サワハン地区はスラバヤ市のほぼ中央に位置する。サワハン地区は比較的、他のカンポンより衛生環境は良く、住居環境も良い。調査対象としたのは、サワハン地区の6つのクルラハンの1つ、サワハンRW（町内会）11である。2016年の調査はそのうちのクドゥンドロ地区（RT（隣組）1～5）である。クドゥンドロ地区はカンポンの中でも比較的収入の安定した層の集まるエリアである。

1984年の調査世帯は、RW11の24戸（124人）、RW12の38戸（243人）、RW13の35戸（197人）の計97戸である。2006年の調査は、RW11の19戸（117人）である。今回2016年の調査はRW11の19戸である。そのうち、5戸は留守またはヒヤリング拒否、1戸は空き家であり、有効数は15戸となる。

Considerations on transformation 1984-2006 of Kampung and Kampung Houses
－Kampung Sawahan Area－

Rikako FURUTA, Teruki YAMAGISHI, Naoyuki HIROTA and Syuji FUNO

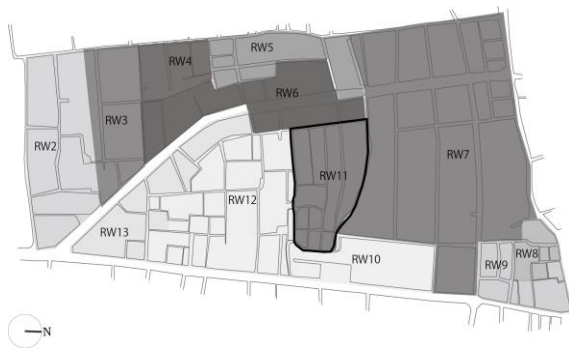


図2 カンボン・サワハン RW (町内会) 構成

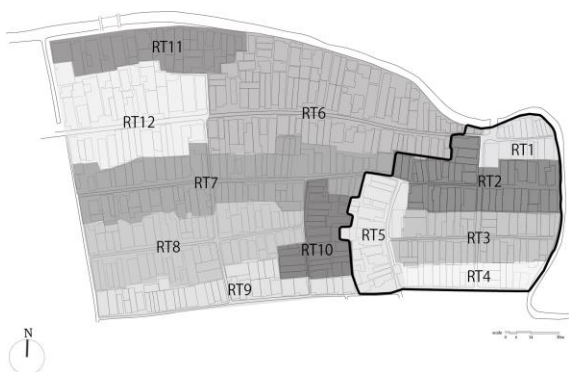


図3 サワハン・クドゥンドロ地区 RT (隣組) 構成



図4 RT1~5 調査住戸 2016 年

5 カンボン・サワハンの住居変容

階数に関して、二階建ては一部二階を含め 2006 年の 73 戸から 161 戸へと 88 戸増加している。三階建ては 1984 年には見られず、2006 年には 3 戸だったが、現在では 7 戸あり、一部ではあるが四階建てのものを 1 戸確認できている。全体的に垂直方向への拡張が見られる。2006 年より地区全体を通して建て詰まり状態であることは変わらないが、今後も少なからず二階建て、三階建て、さらには四階建ての戸数の増加が予測される。

住戸規模 (2006 年・1984 年) は、調査住戸については、180 m²から 15 m²まで様々である。サワハンにおける平均住戸面積は、73.54 m² (68.14 m²・82.3 m²) と 5.4 m²増加している。ひとり当たりの居住面積は、平均 18.6 m² (12.4 m²・14.16 m²) である。ひとりあたりの居住面積も増加している。

世帯規模は平均 4.73 人 (6.16 人・5.18 人) であり、2006 年から比較すると、1.43 人減少している。これは、都市部への人口流入が要因であると考えられる。ひとり当たりの居住面積が増加したことも、これに当てはまると考える。

世帯主平均年齢は、53.3 歳 (46.4 歳・48.5 歳)。スラバヤ出身者が 66.7% と過半数を占めている。スラバヤ出身者やサワハンで生まれて育つ割合が高く、一般的になってきている。世帯主の収入は、Rp 500,000 から Rp 4,600,000 と上下はあるが、平均すると Rp2,346,667 (Rp1,625,000・Rp99,485) であり、大幅に所得が高くなっている。

また、アリサン (頼母子講、無尽) に参加している世帯数は 15 世帯のうち 7 世帯 (46.6%) である。アリサンとは、相互扶助のための伝統的な民間貯蓄の仕組みである。半数以下ではあるが、サワハンにおいて、このシステムが機能しているといえる。一回の金額は Rp1,000 から Rp32,500、Rp50,000 と様々である。アリサン自体が行事や交流のための積立といった形に変化してきているが、一定規模のコミュニティ機能が維持されていることがわかる。

6 実測調査住戸について

RT1~5 (図3参照) の対象住戸にヒヤリング調査を行う。対象住戸は、2006 年に調査の行われた住戸を、同じフォーマットに基づき実測調査を行う。対象は RT1~5 の 19 戸である。

調査住戸のうち、1戸が空き家となっており、5戸は留守またはヒヤリング拒否となっている。(図4参照)

ヒヤリングおよび実測調査を行った住戸のうち9戸は住居プランに変化が見られない。また、1戸は住居プランに変化は見られないが、二階部分を増築しており、垂直方向の変化が見られる。3戸に大幅な変化が見られ、内装を変えているものが2戸、建て替えられているものが1戸である。

増改築により垂直方向に増築されたものも1戸確認できる。その他はいくつかの住戸で内装の変化は見られたが、半数の住戸において変化が見られない。

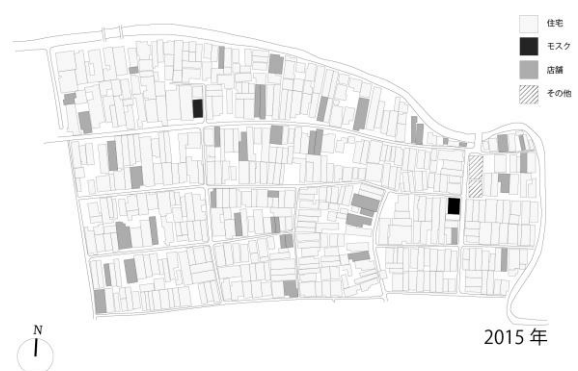


図5 サワハン地区建物用途

7 考察・まとめ

スラバヤにおけるカンポンのこの10年での変容はあまり見られない。しかしながらおよそ32年間の変容は大きいと言える。

本稿で明らかにしたことを以下にまとめる。

(1) 住居プランの大幅な変化はない。住居の建て替えに伴う大幅な変化が見られたのは1戸増改築により垂直方向に増築されたものも1戸確認できる。その他はいくつかの住戸で内装の変化は見られたが、半数の住戸において変化が見られない。(図6参照)

(2) 住戸自体の変化は見られなかったが、全調査住戸において、居住者の移り変わりが見られる。世代の移り変わりや、移り住んできたケースが全住戸で見られる。また、居住者の収入においては10年で大幅に上昇している。それに対して、世帯規模は縮小している。これは、都市部へ人口が流入していることが考えられる。

(3) 空き家の住戸が見られる。建て詰まりとなっている住居地区であるにも関わらず、こうした空き家が見られるということは、これもまた都市部へ人口が流入している要因であるといえる。また、高所得者が増えていることが、都市部への流入を促していると考えられる。



図6 サワハン地区階高

(4) 住居の一部を間貸ししている住戸がある。間借りしている人の多くが、年齢が若い家族層や、比較的所得である。建て詰まりの中で空き家があることから、こうした使われ方は今後も増えていくと考えられる。

(5) カンポンは生産機能と消費機能を持ち合わせているが、サワハンにおいては生産機能が衰退している。このことより、本来のカンポンの特性がなくなっているといえる。

以上のような知見が得られたが、今後さらなる調査と分析が必要であり、今後の課題とする。

27・カンポンの変容過程とKIPの評価その5
Kampung Sawahan ,日本建築学会学術講演梗概集,1985年

5) 布野修司,カンポンの世界ジャワの庶民住居史,パルコ出版,1991年

6) 吉原直樹,アジアの地域住民組織,御茶の水書房,2000年

[注]

※1 参考文献1) p,3~9 1.カンポンハウジングシステム

※2 参考文献3)



図6 調査住戸プラン

[参考文献]

1) 布野修司,『インドネシアにおける住居環境の変容とその整備手法に関する研究ーハウジングシステムに関する方法論的考察ー』,学位論文,1987年

2) 布野修司, 高橋俊哉, 川井操, チャンタニー・タランタナット,カンポンとカンポン住居の変容(1984-206)に関する考察,日本建築学会計画系論文集,No.637(2009)

3) 布野修司,カンポンの歴史的形成プロセスとその特質 インドネシア都市の生活空間に関する研究(1),日本建築学会計画系論文集,No433(1992)

4) 平野敏彦, 布野修司, 太田邦夫, 上杉啓, 前田尚美, 内田雄造, 浅井賢治, 勝瀬義仁,東南アジアの住居と居住環境に関する研究その